眞生

第三卷　五月號

◇宗教は單なる一つの理論ではありません、そこには眞に溫たかい如來と吾れとの感情の融和が充たされてゐるのです。故に眞實の信仰に生きた人々には今までにない一種の靈光の輝くを覺ゆるものです。靈光なき所には生きた宗教はありません。

◇又眞實の宗教は人格の宗教です、故に眞に信仰に生きたる人々は自ら又人格の生活に入る人です。人格なき所に宗教はありません。從つて信仰ある人の生活は又自ら人格的生活となるのです。人格的生活とは即ち人格的行爲ある生活を云ふのです。

◇故に信仰ある人々の生活は又自ら人格ある行爲の生活となるものです。人格者とは人格ある行爲を此の土に顯はす人を云ふのです。神としての生活、即ち佛としての生活は佛敎に於ける眞の目的です。成佛とは即ち此の人格の完成を云ふのです。

◇故に信仰の進むことは即ち人格の進むことです。從て又人格の進むことは即ち信仰の進むことを意味してゐます。人格なき所に信仰は進まず、信仰の進まぬ所に人格は進みません。信仰と人格とは一體不二の關係にあるのです。

◇されば友よ、私共は私共の信仰の進んだかどうかを見るには自分が人格ある行爲に出てゐるかどうかを見ればそれが一番よく判るのです。人格なき行爲、即ち親切のない人の行爲は全く其の人に信仰の無い證據であります。佛心とは大慈悲です。慈悲を受けて、自らも慈悲に輝くのが信仰です。（念）

系統の信仰團にて差當り有力者二三の同意を得たとの事、小生へも　ご御願いいたします。

眞生　第三卷第五號　大正十四年五月一日發行（毎月一回一日發行）第三卷第五
東京市芝區三田四國町二番地
印刷所　玄々堂印刷所

目次

◈本願と十字架　尅子
◈念佛信仰の反省　土屋觀道
◈念佛の現世利益　眞野觀光
◈宗教的要望　尅子
◈主從の見方(三)　中野新兵衛
◈ものは見やう(一)　念阿彌
◈吾朋便り

如來の信水

手ぶらでプラーンと立てゐてはいつ迄經つても水は湧いて來ぬ、掘て掘て掘り抜いて、佛の心に掘り當てるとそれから無いは、什うせぬでも信仰の水が湧き溢れる、自力の念佛でも良い碍やつて見よ、やつて如來の本願力にまで掘りあてる念佛が自然に充ち溢れる、此度は其信水を噴き出す力盛すまでは、穴を壓へても噴き出さ無い水は腾來る。そは何故だ、其下から其下一層強い力で益々勢よく噴き出す水路をるは苦だう。然るに其井戸口の下に在る清水が其上なら一度の噴出では渇れ故に寄て來たからであるに思へぬ河原の信水一孔かるの一滴あり、如來さうに擂が底にまでら逆し水が一度に寄て來たからであるに思へぬ河原の信水

亦立てゐるのだ。其儘其處を掘れ。其足の下を掘れ。忽ち其處に水はこまで湧くるの處を見付けてから、そこまで行くのだ。其儘其處を良さそれを良さそうな處を見付けてから、或は自分で掘てから、とか云て躊躇しうかしてゐる。其內に「他力」になる樣にして掘て掘て「自力」に陥ちてるからとか云て躊躇しうかしてゐる。其內にお前の下の水はサッサとり隣りの人の孔へ流れて工夫して行て仕舞ふ。

堀る間は自分の力で自分が堀るやうに思てゐるが、實圖らんや水の欲しさに惹かれて堀てゆくのである、水が爰まで來いに水と一尺宛つ連れ込んで行て、此處ぞと思ふまで引込むと盛り返して噴き騰て來る。誠に處は一尺宛つ連れ込んで行て、此處ぞと思ふまで來た者は突離されても最う如來の子だ。（尅）

本願と十字架

太り男「昔し法藏菩薩が總ての人間を救ひたいからとて勝手に四十八の大願を發こし、努力の結果其希望を達し、自ら佛となり得又一切の衆生を佛にさせなくては措かぬと地獄んだ踏んで居られるそうだが、かと云ふて一向我々は佛らしくもなつて來ぬし、信仰も起きて來ぬのが多い。イエスは我々の罪まで負ひ、代て十字架に就いて呉れたそうだが、我々の罪は一向消ねて居らぬ、却て罪より罪へ深まつてゆく。そんな勝手な眞似をした佛やイエスがあつたからとて現實の我々への何等救びとはなつて居らぬ、そんな事を正氣で信じとるとか云つてる連中は相率ひて地獄を造てゐるのだ。だから教團や宗團は皆な腐てゐるぢやないか、タノムだり悔改めたりする事は正しく君達には必要な事だらうが、そんなものを我々にまで押賣りせられては溜らぬ、宗教なんて云ふ事は二度と言て呉れるな」

痞せ男「ウン、君は大分法藏やイエスに近附て來た、少しづゝ宗教が判て來たわい。いいか、法藏の前に法藏は無かつたんだ、法藏もイエスも其元氣でやつつけたんだぞ、イエスの前にもイエスは無かつたんだ、だから佛になり復活したので、法藏やイエスが何處において他力で救て貰ひたいと捜し廻てゐたと書いてある、イエスも自ら十字架を建てゝ苦悶に就いた、法藏も超世の願を起して精進した、そしてイエスの法藏の殼を脱いて十字架になり切り、本願そのものとなつた處に神と佛の光明がある、だから「十字架を負ひて我に從へ」

「本願に順へ」と云つてゐるぢやないか、十字架がある本願がある。だから皆高枕で往生し行けると誰が云はれた、「己を捨て十字架に就く」者こそ第二のイエスである。「順彼佛願」するところに獲信あり、第二の法藏がある、番々出世の佛として相繼ぐところに本願の尊さがある。

法藏は彼でなくてお前だぞ、そして私しである。イエスに贖て貰はう、本願に救て貰はうと思ている內は神や佛が蔭で嗤てゐる。

太り男「ウム判つた、俺もやらう」（馳出す）

痞せ男オイ待て、其發願を起こさしたのが佛だぞ、イエスの十字架だ」。（尅子）

念佛信仰の反省

土屋觀道

世間には自分で自分の信仰が有るか無いかさへ判らない人々があり、又自分には信仰ありと思ひ乍らも夫れが反つて一種の迷信であつたりすることもあります。それかと云つて又今度は自分には信仰はないのだ、信仰が足らないのだと悲しんでゐるやうな人に反つて一層深い熱心な正い信仰のある人があつたりします、中には隨分信仰の必要さへ感せず時には反て信仰あるものを一種の迷信であるとさへ云つて之を罵る人々もあれば、中には自ら深く信仰の必要を感じつゝ更らに一層の深さへと道を求めて止まない人々も多いのです。

乍然夫れは暫く別として、今私共は果してどれ丈けの眞實の信仰に生かされてゐるのでありませうか、靜に思へば同じく念佛信者と自らも信じ、又人からも認められる人にして隨分誤まつた信仰の人々もないとは限ない事でせう、此の意味に於て若も少しでも私共に、各自の信仰の眞に正しいかどうかを眞面目に反省することができるならば夫れは確に幸福な生活の一つであります。されば私はかゝる人々の爲めに念佛信仰の反省と題して共俱に此の信仰念佛が如何なるものであるかを反省して見たいと思ふのです。

それにつけても念佛信仰とは抑も如何なる信仰の内容を必要とするものでありませうか、最も正しい意味での念佛信仰とは如何なる念佛であるのでありませうか、先づ此の方面から明かにして初めて私共の信仰をも之に比較して其の正否如何を知ることができるのであります。而て之に對する念佛信仰の標準は卽ち三心のこもつた念佛であります。又一面之を本願の念佛とも言ふのでありますが。此の三心のそなはつた念佛卽ち此の本願の念佛に私共の稱ふる念佛が一致すれば其の信仰は正しい本願の念佛であるといふことを知ることができるのであります。

さて本願の念佛とは如何なる念佛でありませうか、又三心とは何々を言ふのでありませうか、さうして私共の念佛は果して此の本願の念佛卽ち三心のこもつた念佛になつてゐるのでありませうか、共俱に深く反省したいものであります。

靜に想へば私共の一生は實に單なる五十年の一生ではなくして、宇宙と共なる永遠の中の一生であることを知らずにはゐれません、而かも亦人生の一生は無價値な一生ではなくして、實に意義ある人生の一生でありたいのです。乍然眞に私共の生活に於て、果してどれ丈けの永遠の生命に生き又どれ丈けの眞の價値ある人生に今日を生かしてゐるでありませうか、而も世人の多くは此の自覺もなく、寧ろ徒に衣食住の生活と毀譽褒貶の奴となつてゐるの有樣ではありますまいか。乍然私共には此の他に亦他の一一面があるのであつて、それは今こそ微少のものではありますが、時々自己の生命をも放棄して道に殉ずる心も起ります。而て此の道たるや卽ち宇宙の大道でありまして、自利々他圓滿の佛作佛業であるのでありまして、所謂自己の身命を屠して道に殉ずるの生活であります。この心はまた諸佛諸菩薩の本心の要永でありまして、靜かに考ふれば私共の心からなる本心の要求でもあるのであります。而て亦此の心こそ卽ち宇宙の大道に一致し、宇宙の生命に合一するの心であつて、此の外に眞に生きるの道もない

のであります。又此の生活こそ即ち宇宙の束縛を離れた自然の生活卽解脫自由の生活となるのです。而て靜に考ふれば又これ萬人の理想する眞人の生活であります。乍然かゝる眞人の生活ははたして幾人が眞に體驗しゐることでせう。世人の多くは自ら道に殉ずるの方法をさけて、反て私利と私慾とに其身を亡ぼし、貪愛の名利に之事として眞に生きるものとてはないのです。世に道を說き道を言ふものは甚だ多いけれども眞に道を行い道に殉ずるの人は殆んど皆無の有樣です。釋迦佛といひ、孔子といひ、キリストと云ふも要するに此の道の體驗者であるに外ならないのです。而て念佛の信者には此の道に殉するの覺悟が大切です。此の心を釋尊は至誠心であると言はれてゐます。乍然斯くの如きは眞に道に生きんとするものゝみが初めて起しうる心でありまして、善導大師は至誠心とは眞實心なり、眞實心とは利自眞實、利他眞實なり、自利眞實とは自己をして一切の諸佛菩薩に等からしむるの心、即ち一切の諸佛菩薩が一切の惡を制捨し、一切の善を攝取し給ふが如く我も亦之に等しからんとするの心なりと申されてあります。キリストの言葉をかれば彼が汝等神の如く完たかるべしと言はれたのが即ち此の至誠心に當るのです。いはゞ自ら佛陀の生活に立たんことを要求するの心であつて所謂世間の單なる懶怠者の申すやうな口稱一行の念佛ではないのです。乍然今日の多くの念佛者にしてはたして幾人か此の眞實の至誠心に叶ふた所の念佛者があるでせう。思へば寧ろ殘念至極の次第です。中には如來の本願は惡人救濟の本願であるから何もそんな至誠心などは起す必要はない、若しそんな至誠心を起しうるほどのものならば己に夫れは惡人でも亦愚人でもないのであつて、已にそのまゝが已に立派なる一善人と言ふ可きであるから、心な何もそんな至誠どは入るものでもなく又我等凡夫には起しうるものではないとして、之を排斥する人々がないではありません。

乍然眞實の宗敎は本來各自をして神の心と一體たらしめ、佛の心と不二たらしめるところにあるのであつて、進んだ人類の理想は人類理想の最高生活を要求するものでありまして、決て煩惱滿足の生活ではないのであります。故に佛敎の眞の理想は自ら成佛を期するにあつて、自ら神としての生活、佛としての生活に自らを立たしめるところに一切の宗敎に超絕したところがあるのでありまして、所謂眞の念佛者には之と等しき向上の心からなる至誠の心が必要であります。之を釋尊は至誠心であるとして念佛者には必ずなくてはならないよしを觀經の中に示されてあるのであります。

然に今日の念佛者に果して此の眞刻なる眞の向上の心に生きたる人が幾人あるのでありませう。多くは念佛を單なる申せば生れるの念佛である位に輕々に見て、ともすれば其の極樂も反て自已の煩惱滿足の對象に過ぎない位いのものが多くはないでせうか、念佛は安樂の法門ではあるが、乍然凡俗の輩の單なる一時の遊び所ではありません、從つて此の成佛道の理想に立たない念佛はそれは一種の迷信であつて、決して眞實の念佛ではないのであります。故に如何に廣大無邊の如來の大悲であるからといつて、未だ嘗て罪を犯してもよい、愚人であれと敎ゆるものとてはないのです、乍然世に幾人か果して眞に眞生の世界に生きやうと日夜にあこがれてゐるものがありませう、思へばこれも亦實に諒々たるものであります。而も釋尊はかゝる中にも眞に淨土に往生したいと思ふものは正に此の眞實の心を起すべきよしを說かれてあります。而て又支那の善導大師は一層此の至誠心の大切なことを述べてゐられます、我聖祖法然上人も特にこの問題には重きをおいてゐられます。

然るを世人は多く此のことを知らないで、只念佛さへ申せばよいかに考ふるのです。而も此のことを少しでも力强く言ふものがあれば反てそれを異安心かのやうにさへ忌み嫌ふの傾きがあります、乍然之は大なる世人の誤りでありまして、寧ろ各自の最も注意を要する重大問題であります。何となれば私共

の念佛が眞劍の念佛にならないと云ふのも要するに此の眞實の心が足らないからです。若も私共に此の眞實至誠の一心があるならば其の他の二心は自らにして起つて來ねばならないものでありまして、私共が眞實の信仰に熱心になるかならないかもかゝつて此の至誠心の缺亡によるのです。而てかゝる一種の誤まりは稱名の念佛には必ず自ら三心が具するものだとの誤まりから來たのです、それも考へて見ればあまりに三心の問題をやかましく言へば反て無學の人々には甚だ難行ででもあるかに誤解するものがあつて、念佛申す氣になれないやうな事になつてはとの遠慮から、成可三心のことはあまりやかましく言はずして、その稱名念佛の實行の中に之を含ませうとしたのが、今日の誤まりを招くやうになつたのであります。從て同じ三心の中深心の一をとつても又同樣です。深心とは深信の心を云ふ、深信とは自己の機根のあさましさを信ずるのでありまして、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より己來、常に沒し、常に流轉して出離の緣が無いと深く信じ、又一には阿彌陀佛の四十八は願衆生を攝受し、疑無く慮無く彼の願力に來ずれば必ず往生を得ると深く信ずと解かれ、其の他釋尊の證讃、諸佛の證勸、唯信佛語等皆これ信法の一つであります。乍然果して私共の念佛には斯くの如きの確信があるでありませうか、誠に各自に問ふ、吾人は果して現に罪惡生死の凡夫といふ事に成れてゐるであらうか、ともすれば自分ほどの強い信者はないかの如くウヌボレたり、或は又眞に自らの罪惡深重を知ることができてゐるでありませうか、其の他そこまで眞面目に阿彌陀佛の四十八願を信じ、又其の本願に乘じてゐるのであるであらうか、ともすれば阿彌陀佛とは如何なる方であるか、又阿彌陀佛は果して淨土にゐますかさへ信せられてゐるかゝ疑問であるではないか、斯かる信仰內容の眞實の反省を私共は眞に自分の信仰そのものに向て試みる時、果して幾人か自己の信仰の正しさを自證しうるものがあるでありませう。廻向發願心に就ても亦同樣であります。而も此の三心は全く一つも少くことを許されません。一心を少くも其の往生は不可能であるのであります。茲に於て私共は更らに一層の信仰の反省を要するのであります。

念佛の現世利益

愛知光明會員　眞野觀光

念佛は重なる目的か來世にあるのは今更申までもないが、私は茲に念佛の間接的利益たる現世に於ける利益に就て列記して見度いと思ひます。

病氣快復の一例

私の知るべに黑宮ゑい子と云ふ御方がある此方は光明會に熱心東奔西馳寧日なき黑宮平八氏の夫人で近年各所の御別時を參詣して居られるから信者の中には御知己の方か尠なくない筈であります、ゑい子樣は數年前累なる病氣に痛く衰弱されまして當時醫師の診斷には餘命幾何もなきやうの疑がありましたそうであります、然るに光明會の念佛を營まれるやうになつてから段々壯健になられまして一昨年信州唐澤の御別時には山を昇るに他人の介抱を俟たれたのに昨年は獨りで昇り降りが出來本年は愉快に登山が出來前年に艱みたる山路の羊腸曲折せるが却て登山の趣味を沿ふる樣に思はれたのみならず同家では近年頻に御別時念佛を勸められ多數の來客饗應に輕快に應酬せられて些の倦怠の色がないのを見まするとと餘程御壯健と申して差支なかろふと思ひます。ゑい子樣は光明主義の眞隨を證得せられて胸中に何等の不安苦惱なく歡喜の生活に入られた賜であると私に親しく御話し下されまして心に惱みある者は病を發するものとすれば心に樂みある者は病を驅逐すると云ふことも信じ得ると思ひます。

藝術の進歩したる例

黑宮信孝氏は佐屋　光明會頃に日入會された方であります、御入信以來佛緣の深き方にや頗る御進みになりまして先月の例會に靈感を受けられて以來起居動作に溫雅な容態が一層深くなられましたが這般四日市の稚友某氏を訪問された際某氏は一見し其容姿の變られた樣を賞讃し遂に好める道の俳句に話しが移り即吟を求められたそふであります、信孝氏は何心なく筆を取り一筆に月を畫き立處に「芋の煮へ味ふ頃に虫の聲」と付けられたら一坐皆其俳味に醉ふて修飾なき自然の調を帶びたるを感嘆したと云ふことであります、信孝氏の

話に依りますと念佛をされなかつた頃は何んとなく句に飾やがあつて自分ながらに嫌やな心地がしたが念佛をするやふになつてから之れがとれたやふであると申されました。

家庭團欒の快樂

之れは私の實感でありますが私は過去二十年間基督教の信仰を持て居りました。私の家は祖先から淨土宗でありましたが私は別居してゐましたから別に異狀もなかつたのでありますが父の死去後家督を相續致しまして以來は母と同居せねばならぬことになつたが、母は舊來の御念佛（哀調を帶びた）されますその時私は戸外に出でゝ讃美歌を高唱して居ると云ふ甚だ不調和な家庭を組織して居た譯であります、然るに或日私は黑宮平八氏宅に參り不圖光明會別時念佛會に參加致しまして禮拜儀を拜讀致しますと私が朝夕天に在します神よと祈禱を捧げて居ました祈りの趣意と符節を合するが如く、而も其文彩に於て一層の精華を發揮して居るには尠なからず引き付けられました、又念佛の爽かな音調は私の耳底に遺れる過去の哀調を帶びた嫌な念佛と趣きを異にして居るのに感じ私は共鳴する點が多々ありましたから、遂に三回念佛して夜遲く歸りました、母は私の歸宅の遲きを案じ如何なる方面にありしかを尋問致しますから、私は在りの儘を物語りまするとと大層嬉びまして黑宮平八氏と佐藤俊二氏の御二人を招待して拙宅で御別時を勤めますと小供も母も嬉びまして二十年來初めて家族團欒の樂を買ひました、爾來津島の瑞泉寺に光明會を創設し私が參詣に參りますにも母は大層嬉びまして私の行動を憂ふるの念がなくなりました未來の佛果を別として現世の樂みの深くなりしは歡喜に堪ゐぬ處であります、又私の地方は眞宗の盛んな土地でありますから私の讃美歌に嫌厭たるものありし輩は私の念佛を唱ふるを聞き大層稱讃する樣になりました、他の毀譽褒貶など意に介すと言へば夫れまでゞすけれども殊更に他の惡戯を買ふも愚であると思へば念佛入信の遲からざりしを難有く思ひます。

念佛と深呼吸

名古屋の渡邊といふ人が念佛をすると身體が良くなるといふは深呼吸をするからではなかろふかと云はれました、之れは私は頗る共鳴するのでありまして此頃靈可止觀を拜見しますると智者大師は念佛の時風七處に觸るゝと說いて見ゐをすから大師も念佛の呼吸に關係して居るのを御認めになつて居た樣であります、何も聲を出して祈禱文を唱へるは念佛に限らず、他の宗敎に行ふ勤行にもあるので念佛以外の他敎が默禱であると云ふのではありませんが念佛は取り分け深呼吸に叶ふかに考へられます、と云ふのはナムアミダブツの七音が私の考へますのには阿吸の二字が排列してある樣に思へます今之を分けて見まするとと

阿部　ナア　アア　ダア　呼
吸部　ムゥ　ミイ　ブゥ　ツゥ　吸

一音置きに阿の音があつて阿部に屬せしめたミの一音のみ阿のイの吸がありますが之れもムイと考ふれば確かに阿部に屬しまする、私の聞いて居るのでは阿は降伏で吸は攝取である、阿は積極である、吸は消極である、阿は呼氣にて他を調伏せしむる意がある、吸は吸氣で自己を守る意がある、南無阿彌陀佛の六字には即ち阿吸を三回排列してある呼吸の弱き人は切るも致方なきも出來得るなれば初め一息きに鼻より腑の下迄で呼吸を強く吸ひ込み置き阿で呼出して腹を小にし阿で鼻より息を少し吸ひ腹を膨らます氣持で念佛すれば深呼吸の目的に叶ふ樣に考へました之れは此の方面に興味を持て御出でになる御方に御試しを願ひたいと思ひます、夫れから光明會の別時念佛では私は三禮が深呼吸に叶ふて合掌し又五體を地に投ずるとき手を上向して佛足を擧ぐる氣持ですれば餘程體育として佛を拜する以外間接の利益がある樣に感じましたが如何なるものでありませふか。

念佛三昧會　自五月十八日　至同　廿二日

大阪市南區東平野町五貞松院にて
導師土屋觀道師

宗教的要望

尅子

靜かに冥目合掌して深夜泌々と自分を振返つて見ると、悉く惠まれたものばかりで囲まつてゐる自分である。先づ着てゐる着物から帶足袋に到る迄知らぬ内に皆他人の手から費ひ集めて來て自分に附けてゐるものである、或は喰べてゐた物、飲んでゐた物、是れ皆他人の手を煩はして始めて自分へ這入て來た物である、今の一刻健康と安全を保たして貰て居るが爲めに、什れ丈けの人々が蔭になつて働いて居て呉れる事が解らぬ、周圍の一切の物と人とが聚つて私一人を育てゝ居て下さるのである、總ての努力の總和が私一個に今集注されてゐるのである、何といふ有難い事でせうか。其お惠みに預てゐる私が有るといふ事は、故意か偶然か直接には兩親から生んで貰て今斯うして生存して居る者であるが、何故あつて生命ある者として此麽世の中へ抛り出されて來たのでせう、それは無理に後から理窟を付けるものだと云へば云ふものの、數ある動物の中で人間てな者に生れさせられたと云ふ上に何等か意味がありそうに思へてならん、そしてバタバタと死んで逝く澤山の人々の中に、まだ死なされもせず生かされてゐると云ふ事にも何だか意味がありそうに思へます、死なねばならんと云ふ力と生きたいと云ふ力との中心になつて、現在生きて居れるといふ事は何と云ふ微妙な均約でせう、深い目的が有て今の一刻生を賦與されてゐる樣な氣がしてなりません、即ち重い責任を自然に帶ばされて居る樣な氣がしてならんのであります。

誰か或者が斯麽に着物から食物、往家から生命まで與へて私といふ者を造て、そして其私に何等か仕事をさせやうとして居るやうに思へてなりません、山川草木は皆私を悅ばしめん爲めに在るのであり、總ての科學も文化も私一人の幸福の爲めに存在してゐるのである、そして今私に何をさせやうとしてゐるのでせう、私の背景には誰か人が居るやうで、そして其人が何等か作意してゐるやうであるが、私には其人からの意志が充分に解らず、判らぬ儘に衣食し生命を費してゐるやうに思へてならん、本當に勿體ない事だ、惠まれた物は勝手に喰つたり使たりして居り乍ら、其人からの希望は一つも履行して居らんといふのも實は其人からの希望が充分自分に汐み取れて居らぬからで致し方がない、かと云ひ乍ら實にどことなく濟まぬ氣がしてならぬ。是れが宗教心の芽生へだらう。と思ひます、あながち强ひつた考へでなからうと思ひます、少しく眞面目に深く洞察した者には自然に起て來る感情だらうと思ひます、即ち總ての存在生存の奥には何等か「宇宙意志」とでも云ふ可き無形の大なる力があつて、其力、其生命が無窮に創造し發展して行くものではあるまいか、其生々の氣の一分を享けたものが我々であり、同時に草木國土一切であるのである、而し其等互々は未だ此宇宙意志を充分察知せない儘に盲目的に活動してゐるのではあるまいか、だから個々には矛盾もあり撞着重復もあるが、其矛盾混亂の儘宇宙意志の方からは統一であり調和である、調和均整であるが此等無自覺の個體的には衝突不平等との觀念無き能はぬ、要するに此等は宇宙意志そのものが個々に徹底して居らぬからの悲劇であつて全體としての悲劇でも不完全でもない譯である。

それで個々が宇宙意志を如實に體得し顯彰して初めて發展が順調圓滑であり、又宇宙意志そのものとしても如實に個々を通じて發現したい譯である、爰に最大完成の世界がある。今其宇宙意志とは宗教的言葉を以てすれば佛であり、神である。其意志生命の邊に就いて云へば報身の佛であり、既に此意志が我々個體の識ると知らざるとに係らず完全な發現として現實に存する邊より云へば法身の佛である、そして其意志を如實に體現したといふ自己の自覺より此れを化身の佛と云はる可きである、即ち宇宙意志の儘に全分の發現として動き得るものが個體としての完成であり、又宇宙意志の方としても本意である、之れ應身の現成佛である、即ち釋尊の如くイエスの如く完全なる宗教人として、宇宙者として生きる事が我々の最大目的であり、爰に至て何が爲めに生かされてゐるのであるかも自然に明瞭となつて來る、即ち完全な共生者愛の實行者、たらんとするにす在る。

主從の見方（二）

中野新兵衛

六如何にせば與へあふ事が出來るか

もし主人に缺點がある場合、主人は我々使用人より上だから注意することは失禮にあたる、……なぞゝさし控へているやうな使用人を持つていてなんの役にたちましようか、又使用人の短所を知つて居ながら、ア、彼等は無學のものでつまらぬ徒輩だ、卑しいものだから金さへ取ればいゝのだ、小言をいつて嫌はれるよりか默つていて働きだけの賃金さへ拂へばそれでいゝのだ……といふやうな主人が是非必要なのでしようか？世の中にこう云ふ主人も多くさんありますが、之等のやうな主人を大切にせねばならぬ必要がどこにあるでしようか？全く主人としての價値のないものといわなければなりません。

こんな事は問題にもならない極小さいことであります。こんな小さなことを知つて見れば、思ふさへ馬鹿らしい氣がする程でありますが、この小さな問題の解決がつかずに苦しんで居る人たちが世の中に幾百萬あるか知れません。

以上申しましたやうに、知つて見ればなんでもない小さなことに、顏を赤くしたり靑くしたり、時には他人を傷け家庭を亂したり、果ては世界中の寶とさへかへられない自分の尊い命さへ捨てる人が出來るのであります。

そこで私はつねに思つて居ることがありますが小さくとも一つ工場で而も同じ結果を得るため互に働くのでありますから、常に自分の思ふこと胸にあることを打ちあけて相談をする、其時に於て知つて居るものは語り聞かす、知らないことは皆なで考へて研究する、これが前申しました與へあふといふ人間の生きて行く眞の道でありまして、與へる人も植へるばかりで減る氣遣いのないものでありますからほんとうに心の底から與へあふことができるのであります。

七、最も早く實行者

これを最も早く知つて世人に示したのが佛敎者のいふところの「釋尊」、キリスト信者のいふ「イエス」等の大人格者であります。でありますから私達がこの立派な道を研究するにもすでに大人格者の苦心研究したものを、其まゝ應用するのでありまして、例へば私達の日常なくてはならぬ電氣燈も遠い山の奥から水の力で起した電氣を電線に依つて數十里の地に導いて各々工場なり家庭に其線を引き込んで夜になれば「スヰッチ」を撚つて達の思ふ場所へ自由に應用して行きさへすればいゝやうに最も樂々と與へられることも早いのであります。

そうして其行ふことに間違はないのであります。若し間違つて居るなら、それは卽ち其人が間違つている證據であります。

八、そこで私しが皆さんにお願いしたいのは

今まで申しましたことは、ほんの一部分だけでありまして私の思ひの萬分の一にも足りないのであります、兎に角、眞に樂しく嬉しく勇ましく皆さんにもやつて頂いて、樂しさうな顏を毎日〳〵見て暮したなら私しの喜び之れに過ぎんのであります。

さうした生甲斐ある生活振りが、たとへ一年でも半年でも見ることが出來ることでありましたら私しや死んでも惜しいとは更ら〳〵思はないのであります。

一昨年頃から目論見ましたために、今まで風波のなかつた營業も分離せなければならんやうな破目になりました、それも考へて見ますと眞實に皆きて行きたい……眞實に樂しみたい爲めに起つた問題でありますから、皆さんにも忍んで頂くとしても、今後かれこれなく進むべく早くも皆さんが月の内に僅かの休み日を利用して、何回かの御會合をして下さつたにもかゝはらず、中途私しの病氣を得ましたゝめ、心ならずも、中止の狀態になつたといふことは幾重にもお詫びもうし上ますと共に、反つて皆さんに御心配をかけ、餘分の勞力を強いて何等不足の言葉一つも受けなかつたことを心からありがたくお禮をまうします。

こんなありさまで、折角の思ひ立ちも、水の泡と消へてしまひましたが、然し過ぎさつたことは

最早慮へたとてもとりかへしのつくわけでもありません。

これもとりかへすには、一生懸命、に勇往邁進して進むよりほかにとるべきみちはないのであります。

でありますから本年は、新たまる年のはじめから毎月一日十五日の兩日午後半日づゝ必ず一場におあつまりを願つて、おたがひの向上をはかり眞に心の底から解けあつて、あたゝかい、人たちばかりの活動場にしたいのであります。

皆さんもともに、私しの意を諒とせられて、おたがひに、あいあたへあつて、一心にやつていたゞきたいのであります。

まだ書きたいことは多くさんありますが、まだ病氣も完全に復しておりませんので今回はこれで止めておきます。

これからは時々事にあたるたび毎に、思ひのまゝを書きあつめて御覽に入れることにいたします。

九、終りに及んで今一言

今少し附け加へて念のため申したいことは、この會合は普通の會合でありません、いゝかへると一生懸命の相談會でありますからその度毎あつまる人と、あつまらない人とは一年の内に大變な差ができてすゝんだ人と劣つた人ができますから是非ともおあつまりを願ひます。

すゝんだ人のなかには幾年たつても、かはらないからつまらん〳〵といつているやうな人は、終に劣つた人より劣らねばならないやうなことになりますから是非お集まりを願ひます。

都合によつて會合には出席簿をそなへて、出席者だけには特に私しを嬉ばせて下さつたお禮としてそのしるしに賞を與へるかも知れません、なるべくそんなときにも不足のでないやうに不斷から心掛けておいて下さいますことを。

大正十三年一月

思つたことを其儘此冊誌に現はしたのでありますが、これで皆樣の御同意を得又は御參考の一端ともなることでありましたら私の喜び是に過ぎないのであります。私しの申しましたことの内に間違つたところがありましたらお氣附の點を御知らせ下さい、れそ私しを愛して下さる皆樣の御厚志かと心得て居ります。

（謝辭言辭文）

■ものは見やう（一）

念阿彌

一、絶對の自我

昔からも物は見やうといはれてあるが同じ宗教といはれる中にも其の見やうによつては全々相反した見やうさへあることを知つて來た私にはまた全々相反したと思ふ他の宗教に對しても全同じとさへ信ぜざるを得ない一點があることを發見して來た。そうしてかゝる考へは近頃殊に今日の過途時代に於ける我が日本國に於て一層その然るを見るのである。乍然かゝる時代に於て私共は其の見方の何れをとるべきものであらうか、或はその一によるべきであらうか、或はその二つによるべきであらうか、若しその二者の見方に於て全く相反する矛盾のものをそのまゝに二つともとり入れるとすればさういふ思想が私共にとり入れることができるであらうか、正と感ずるものと邪と感ずるものと二つを同時にとり入れることは果して私共の心に承知できることであらうか、又眞理と感ずることと非眞理であると感ずることとを同時に私共の心に調和することができるであらうか、殊にそれが私共にとつて大なる影響があるものであればあるほど更らに私共は此の感を起すことが大なるものである。乍然更らに之を考ふればかゝる二つの全く相矛盾すると考へられるのも之又一つの見方であつて更らに之より大なる見方は此の二つの相矛盾するものを矛盾のまゝに統一することのできる一大見方である。此の二者を一なるものゝ中に入れて二者を批判することのできることは即ちその矛盾を包括する自己のある證據ではなからうか。さうして此の二者を批判せんとするその大なる自己、而もそれに立脚して一切の人生を批判する自分そのものを直觀したとき、私共は此の最も少なりと思つてゐた自分が忽ち最も大なるものであつたことを直觀せずにはゐられない。之を絶對の自我といふのです。

二、最大なる自己

それについて古來自分といふものを如何に見るかといふことは私共に於て最も考へられた一つの

尊い宿題である。自分を最も小なるもの、力ないもの、はかないもの、つまらぬもの、諸行無常のもの、相對的のもの、有限的なもの、愚なるもの、罪深いもの、などとして見る見方もあらうが、それと共に自分を最も大なるもの、力あるもの、たよりあるもの、尊嚴なもの、賢きもの、罪なきもの、常住なもの、絶對なもの、無限的なもの、などとして見るべき見方はないか、それとも此の二者の矛盾をそなへたものとして自我を見るべき見方もあらう。而て私は靜かに此の二者の間に横はる一つの眞理を發見して、之を私共自身の上に反照して見るといふことを近頃に至つて一層考へざるを得ないのである。私は宇宙の中の私であると見るが正しいか、夫れでも宇宙が私の心の中のものであると見るが正しいか、之は大なる考へものである。此の私は更らに觀る者と觀られるものとの立場に於て自分の外に觀る者とてはない、即ち一切のものを悉く觀らるべき對象として向ふに回はして、自分自身までをも抱括して見た私自身は絶對主觀の私であつて、内容からいへば觀るものと觀られるものとの二はない。そこには二者が一つである。所謂絶對主觀を直觀し來る時、神といひ、佛といつて自ら尊崇して措かないものも其の實自分と一體である。自分そのものを外にしてどこに如來なるものがあるであらうか、否、神とか佛といふものを自分の外に立てゝ之を崇拜するといふことも決して惡いものではない、時に於ては又之なくしてはならないこともある。乍然、眞實の自分そのものを直觀して自我の本質を反省すれば神を認め佛を認めて之を崇拜するに足ると信ずることのできるものは少くとも神の神たるを認め佛の佛たるを認めうるの力なきものではできない、加之此のかゝる神たり佛たるものを認めうる力を有してゐる自分は之と同時に神に脊き佛に脊むくところの自分までをも直觀し、一切を自他一切をも自己の中に入れてゐる自己である。此の大なる自己、私此の大なる自己をこそ眞に認めざるを得ないのである。神の如き生活、佛の如き生活に値いする神人の生活を發見し得たばかりでなく、これ等の一切の世界を直觀して更らに大なる自己自らを宇宙の顯はれ、宇宙精神の表現であるとして見ることは誤りであらうか。そこには、我即宇宙としての最高獨尊の眞我を見る。そこにはどんなに自分を力なきもの、いやしきもの、愚かなもの、無常なものと見やうとしても、一切がそんなものには見られないことを發見するのである。

皆樣と一緒に此の眞實の人生をし て意義あらしめたいといふことです。さうしてそれには各人各位が常に自ら各自の行爲を意義あるべく反省することと、此の反省の力を以つて深く如來の慈光に照され、此の慈光裡中に更に一層協力して、專心慈光宣傳に力を盡すことではないかと思ふのです。それには誰でも其の人應分の力はあるものかと思ひますから、決して各自に遠慮するところなく毎日毎日の上に應分の活動を意識的にしていたゞきたいと願ふものであります、私共の修養は自からつとめずして自然のまゝが即ち修養である生活であるべきは當然でありますけれどもそれは最後の理想であつて、其の理想に到達する順序としてはやはり同心相よつて少づゝでも以つて相協力して自分達の理想に向つて努力して行くといふことでなければならないと思ふのです。されば念佛の信仰に於てもやつぱり同じであり、まして、先づ私共は先輩道友の教へをうけると共に更らに之等の人々と一心同體の姿となつて道の爲めに自ら立つの一大覺悟になつてもらいたいものです。ついては各地に於ても各自御集りの上一層信仰生活の御相談が願はしう存じますよ。

思へば私の知友の方々にして已に久しく御目にかゝらない方々も多くあり、又讀者の方にして未だ一度も親しく御目にかゝらない方も多いのでありますが不肖ながらにも近來の私には一層皆樣がなつかしく又したはしくてならない所の

□浦賀より

土屋觀道

私は只今浦賀の方へ來てゐます昨日から五日間の豫定ですから此のお便りを皆さんに見ていたゞく時は已に私は東京に歸つてゐる頃かも知れません、乍然私の其の願は私がどこに居やうとさまで變つた事ではありませんが、どうか共に今後とも從來に倍して更らに

感じに先だたれてゐます、つきましてはどうぞ御葉書の御便りなりとも賜はり度、心から御願申て止みません。

◇吾朋便り

○岐阜　行基寺様より。

四月六日御手紙奉拜見候、私より差上しハガキと行違ひに相成申候、思ふ心は同じく今回定期の別時中止の爲め何とのふ心穩かならず且御上人に一度御目にかゝり度御ハガキにて御照會申上候次第御上時に記念にオルガンがをとの話が人より御手紙に接し御心の内奉察會員の中で持上つた時の道友きみ御氣毒様に存上候五月佐屋へ御出子様の口添へによるのです、今母に候らはゞ是非御目にかゝり御話君は亡くなられましたが其の御志し申上候四月十五日は定期の中日は成就したのです。永く記念して頃に當り候まゝ一日丈同友と別時道友と供に喜びたいと存じます。勤むる事に致し居候。

□東京　土屋觀道

○去る十五日島根の平田民之助様からかねてから眞生愛讀者であつた平田基様御逝去の御報知がありました。春秋に富む身をと遙かに哀惜の情に堪へません。

父君から御寄贈下さいましたお金は故人とゆかりの濃い此の眞生に補助させて頂きます。

○次にロンドンの田中完三様から母君きみ子様の御他界記念として大形のオルガンを御寄贈下さいました、昨春中島觀秀老師の一周忌の時に記念にオルガンがをとの話が人より御手紙に接し御心の内奉察會員の中で持上つた時の道友きみ御氣毒様に存上候五月佐屋へ御出子様の口添へによるのです、今母に候らはゞ是非御目にかゝり御話君は亡くなられましたが其の御志し申上候四月十五日は定期の中日は成就したのです。永く記念して頃に當り候まゝ一日丈同友と別時道友と供に喜びたいと存じます。勤むる事に致し居候。

寄贈並誌代拂込芳名

寄贈之部　○金拾圓青木九一様

○金五圓也清水恒三郎様平田民之助様浦賀眞福寺様

誌代之部　○金拾圓岐阜本誓寺様扱ひ、清水光明會扱ひ○金貳圓山里秀隨様西田くわ様弓場あい様岩崎親雄様金澤高運様○金壹圓大竹證孝様土屋善之助様中瀬小三郎様北川藤助様長谷川重藏様武居はつ様二見眞定様新潟岡野西照寺様大阪神石村念佛寺様林すゑ様吉水大信達三浦辨定様村井亮嚴様内田くり様内田とし子様内藤赴夫様。

定價一部十錢　半年六十錢　一年一圓
振替口座東京四七二八八番　眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
編輯兼發行人　土屋觀道
東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行所　眞生社
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷人　三井清次
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷所　玄々堂印刷所

眞生

第三卷　六月號

◇未だ一度も見たことも聞いたことも味つたこともない者をたゞ單なる又聞きや想像で之を知るといふことはできない。もし眞に之を知らうとするならば自分自身に之を經驗すべきである。

◇然に世間の多くの人々は自分でこの經驗をしやうとしないで多くは單なる人の話や讀書によつて之を知らうとすることはとんでもない誤りである。

◇殊に目に見ることも、手に觸れることも、又香いたり聞いたりすることもできないものを、而かも人の言葉や想像によつて之を知らうとすることは反て眞實に達かるの基いである。

◇然に宗教信仰は全く如來と自分との直接經驗である。從つて宗教の事實は自分自身の體驗の外には人にも知れず、又人からも聞かれるものではない。

◇尙それば かりではない。たとい一度そのことを經驗したからといつても、一度過ぎた後から之を考へたり想像したりしても、それは眞實の宗教ではない。それは己に過云の經驗に過ぎないものである。

◇だから、いつも眞實に生き、又いつも現在に生きやうと思ふ人々は、一切の之等の概念や、言葉の宗教を打捨てて、即今の當體に於て、如來と自分と常に離れない信仰の體驗に住せねばならぬ。

◇宗教はどこまでも、自分自身の直接經驗の事實である。從つて本を讀んだり、人から聞いたり、又考へ出さうとして得らるべきものではない。どこまでも一切の概念や模倣を離れて眞實の體驗に入るべきである。（念）